

高田 博行・田中 牧郎・堀田 隆一 編著
『言語の標準化を考える—日中英独仏「対照言語史」の試み』

(大修館書店 2022年6月刊, viii+247pp.)

京都大学
家入 葉子

Key words: 対照言語史, 標準化, 変種, モデル

1. 序

本書は、異なる言語史を専門領域とする10名の著者が共通のテーマについて語り合うという、野心的で興味深い試みが結実した編書である。対照言語学は研究手法の一つとして広く確立しているが、異なる言語史を比較対照しながら議論する試みは、確かにあまり例を見ない。本書の冒頭で「日本語であれ、中国語であれ、はたまた英語、ドイツ語、フランス語であれ、言語史の研究者は自らの専門とする言語以外の言語史をあまり心得ていない」(p. iii) と述べられていることはその通りで、英語史を専門領域とする評者にもあてはまる。現代英語を理解する上で英語史を学ぶことがどれほど重要であるかは心得ているものの、他言語となると、現代語の姿にばかり気を取られて、歴史的視点から深める努力をしてこなかったと感じる。

2. 標準化——テーマの設定とその扱い

言語史では、共時的な観察に通時的な時間軸が加わる。これが多言語になると次元がさらに上昇するので、扱う情報量が膨大となる。そこで本書は「言語史におけるさまざまなテーマについてやみくもに比較対照しても、実態は見えてこない」(p. 5) とし、共通の議論の場として、言語の標準化というテーマを掲げる。ただし、この場合の標準化は極めて緩く定義されているようである。あるいは定義することをあえて回避し、変異が多少なりとも収束に向かうベクトルが観察できるのであれば、その動き全般を標準化の枠組みで議論するという方針のようにも見える。

というのも本来、標準語の議論には高度にポリティカルな側面があり、必ずしも本書に見られるような協調的かつ穏やかな雰囲気には落ち着かない場合も少なくないからである。第11章の「漢文とヨーロッパ語のはざま」では、その一面を見ることができる。評者の個人的な経験について述べると、International Conference on the Standardisation of English(ケン

ブリッジ大学, 1997年7月開催)での議論と ICEHL (International Conference on English Historical Linguistics) 12 (グラスゴー大学, 2002年8月開催)での基調講演の1つでこの厳しさに触れたことが、現在でも強く印象に残っている。*Oxford English Dictionary (OED)* で standard を調べると, “A language variety of a country or other linguistic area which is by convention generally considered the most correct and acceptable form, esp. for written use” の意味での用例は1904年からである。ただし *OED* の例文を全文検索した Hickey (2012:2)は, “southern or standard English” が1836年に見られるとし, さらに standard English の概念そのものは18世紀に遡るという。いずれにしても英語史全体を視野に入れて眺めると新しい概念であり, 当時の時代背景と合わせて考察することが必要であろうと感じる。

しかしながら, 本書では必ずしも「標準語」にこだわることなく「標準化」(standardization)を中心的なテーマとすることで, ポリティカルな側面が大幅に軽減されている。「標準化」は学問の用語であるから, 研究者が各自の定義に従って利用することが可能であり, その定義に合致する場合には, 時代をどこまでも遡って使用できることになる。標準語という概念が存在しない地域, 存在しない時代であっても, たとえば本書が各所で示すように変異が収束に向かうベクトルが存在するのであれば, そしてそれを標準化と定義するのであれば, 標準化の議論の対象となろう。こうして本書では異なる言語, 異なる時代のさまざまな現象についての比較対照が可能となっている。

本書についてさらに具体的に議論を進めるために, 各章のタイトルを著者名とともに示すと, 以下のようになる。

第1部 「対照言語史」: 導入と総論

第1章 導入: 標準語の形成史を対照するということ (高田博行・田中牧郎・堀田隆一)

第2章 日中英独仏——各言語史の概略 (田中牧郎・彭国躍・堀田・高田・西山教行)

第2部 言語史における標準化の事例とその対照

第3章 ボトムアップの標準化 (渋谷勝己)

第4章 スタンダードと東京山の手 (野村剛史)

第5章 書きことばの変遷と言文一致 (田中牧郎)

第6章 英語史における「標準化サイクル」(堀田)

第7章 英語標準化の諸相——20世紀以降を中心に (寺澤盾)

第8章 フランス語の標準語とその変容——世界に広がるフランス語 (西山)

第9章 近世におけるドイツ語文章語——言語の統一性と柔軟さ (高田・佐藤恵)

第10章 中国語標準化の実態と政策の史話——システム最適化の時代要請 (彭)

第11章 漢文とヨーロッパ語のはざままで (田中克彦)

第1章と第2章が本書全体の導入部分にあたり, 第3章から第10章が異なる言語におけるさ

まざまな意味での標準化を扱う本書の中心的な部分である。11章は本書全体を統括する、言わば終章にあたる。各章の概要は、本書の導入部分の15～17頁でそれぞれ4～5行程度にまとめられているので、ここで繰り返すことはしない。しかしタイトルを見ただけでも、いわゆる Haugen (1966) の標準化のモデル、すなわち「選択 → 成文化 → 精巧化 → 受容」(詳細は本書の p. 11) に必ずしも合致しないもの、すなわち特定の変種の選択というよりは、コミュニケーションを円滑に進めようとする意図が働く中で自然な形で変異の収束が起こる事例も標準化の枠組みで取り上げられていることがわかる。たとえば第3章「ボトムアップの標準化」は後者のものであろう。

他にも話し言葉と書き言葉の関係性(たとえば第4章の「書きことばの変遷と言文一致」)は、変種間の競合や選択というよりもレジスターの問題、ヨーロッパの言語を扱った第6章～第9章では、標準化が他言語との関係性の中で議論されている点が目を引く。後者には、当該言語のラテン語からの自立に注目する場合(第6章「英語史における『標準化サイクル』」、第9章「近世におけるドイツ語文章語——言語の統一性と柔軟さ」と当該言語の世界への拡大とこれに伴う言語変化に関心を向ける場合(第7章「英語標準化の諸相——20世紀以降を中心に」、第8章「フランス語の標準語とその変容——世界に広がるフランス語」)がある。

このような多様な議論の中では、標準化は必ずしも上からの変化だけを言うのではなく、下からの変化も含まれることになる。この点が本書の面白いところであり、第1章の導入部分においても「標準化を推進する主体・方向」と題する節(pp. 13-14)が設けられ、トップダウンとボトムアップという二つの方向性が示されている。本書は、このように標準化を緩く捉えることにより、対照言語史にふさわしい拡張性のある議論を可能にしている。

標準化についてのそれぞれ著者のスタンスに温度差があるのは当然であるが、いずれの著者も建設的な形で議論に参加し、異なる言語間の共通点と差異に目を向ける。また第10章「中国語標準化の実態と政策の史話——システム最適化の時代要請」(彭)の「標準化に排他性はつきものだと言えるかもしれないが、大規模な破壊が伴う強硬な統一政策の推進は、多様性、独創性の消失をもたらすというマイナスの面があることも歴史の鏡が映し出している」(p. 198)という記述に6名の著者がそろって意見を書き記しているように、標準化には個別の言語を超えた議論が効果的であることを、本書は具体的な形で明らかにする。ジェンダーについての社会的な変化への言語的な対応についても、異なる言語史の立場からの情報提供(例えば、ドイツ語では *Bürgerinnen und Bürger*, *BürgerInnen*, *Bürger/inn/en* などでの対応)があり、効果的な比較対照が行われている(pp. 152-153)。

ただし、課題が皆無というわけではない。標準化を緩く捉えれば捉えるほど、「典型的な」標準化でない事例も含まれてくる。このため、標準化の他に、共通語化、公用語化、規範化、通用化、統一化など、場面ごとによりフィット感の強い用語が準備され、これを繊細に使い分ける工夫がなされている。たしかに第3章のように標準語と共通語との違いが明確に定義されている場合(pp. 43-44)もあるが、別の言語、たとえば英語史では、これに対応する表現

が必ずしも十分に準備されているとは言えない。すなわち異なる言語間で、この微妙な差異についての感覚がどの程度共有されているかについては若干の不安が残る。一方、第6章で頻繁に使用される「焦点が合っている」(focused) という用語は少なくとも評者の印象では、Smith (1996) で紹介されたのを契機に英語の標準化の議論で使用される頻度が増えたようだが、必ずしも英語の標準化の議論で広く使用される用語ではなく、まして他の言語史ではあまり一般的ではないものと考えられる。したがって、この用語によって示される状況が他言語のどのような状況に対応するのかが見えにくい。すなわち、各言語史の研究者はおそらくそれぞれの分野で若干異なる道具立てを使用しており、対照言語史が複数研究者による協働の場であるとするならば、今後、この問題にどのように対処するかが課題の一つになるかもしれない。

また、日本語を扱った章では、どちらかといえば話し言葉に議論の中心が置かれているのに対して、西洋の言語、特に第6章の英語史と第9章のドイツ語史では、書き言葉を中心に議論が展開する。中国語史の標準化と他の言語の標準化の時代的な比較対照が難しい背景には、対象とする時代の長さが大幅に異なることが多分に関係しているだろう。しかしその他の言語については、話し言葉を扱う場合、書き言葉を扱う場合、また後者の場合は綴り字、形態論、統語論、語彙論など、扱う対象を変えることで標準化の歴史の見え方が変わってきたり、言語間の比較対照がより現実的なものになったり、やや現実から遠のいたりするのかもしれない。ここには、各著者が限られた紙幅の中で何を取り上げるかという選択の問題もあるが、各分野の特性も関係している可能性がある。たとえば英語の場合、英語史の大きな枠組みが形成された時代や地域方言についての研究が積極的に進められるようになった時代にはまだ統語論がそれほど一般的ではなかったために、多くの伝統的な標準化理論では言語の統語的な側面が体系的に論じられることが少ない。他の言語史においても、それぞれの言語ごとに、議論を進める上での型のようなものが背景にあるのではないだろうか。その「型」そのものを比較対照してみたいという感覚も残る。この場合の型とは、そもそも言語のどの側面に注目するのか、何を手掛かりに時代や地域を区分するのかなど、言語史全般にかかわることを含んでいる。

3. 本書の構成の面白さ——評者のコメントを添えて

前節で述べたように、異なる言語史を扱う上での課題はたしかに残るが、異なる言語史を専門領域とする著者間でスムーズなコミュニケーションが行われており、本書は全体として統一感のあるメッセージ性の高い編書に仕上がっていると感じる。それを可能にしているのは、本書の至るところに見られる構成上の工夫であろう。第1章の「導入: 標準語の形成史を対照するということ」(pp. 4-23) では、本書を読み進める上でのキーワードの解説がなされ

ており、初学者に有用なばかりでなく、言語史を知る研究者にとっても再確認の機会が与えられている。また、先に述べたように、ここで各章の概要が簡潔にまとめられているのもありがたい (pp. 15-17)。第2章「日中英独仏―各言語史の概略」(pp. 25-35) で、各言語史が2頁ずつの分量で簡潔にまとめられていることにも工夫を見ることができる。概略を作成する立場になって考えると、2頁で言語史をまとめるのは容易ではないところであるが、読者の立場からは、本書の中心となる第2部を読み進める上で、この章の存在が大きな助けになっていることは確かである。ただ、言語史の概略に正面から取り組んだ言語と、初めから標準化に特化して、標準化の歴史をまとめた言語があるようで、若干、枠組みの統一性に欠ける面はないとも言えない。

本書にはさらなる仕掛けがある。本書の最大の特徴であり、面白さでもあるのは、中心となる第2部の各章において、当該の章以外の著者がコメントを付加し、場合によっては当該の章を担当した著者がこれに答え、フォーラムが形成されている点である。参加者間の議論の様子がそのまま印刷される場面は、ジャーナルの特集などではよく見ることがあるが、このような編著書の場合にはそれほど多いとは言えず、本書を特徴的なものになっている。この形式からすぐに思い出したのは、Laing & Williamson (1994) の *Speaking in Our Tongues: Proceedings of a Colloquium on Medieval Dialectology and Related Disciplines* である。この論文集には、1992年4月にエディンバラ大学で開催されたコロキウムでの議論の風景をそのまま再現した意見交換の場が織り込まれている。ただし、それぞれのセクションには司会者が配されているので、本書のような他の著者がいわば読者の一人として自由にコメントを記すというのは少し性質が異なっている。本書に戻ると、一般の読者は、コメントを付けた読者でもある著者とともに疑問を抱いたり、類似の事例を思い描いたりしながら、いかにも議論に参加しているかのように各章を読み進め、同時にコメントをテキスト部分への脚注としても利用することができるありがたい仕掛けであると言える。大変興味深い企画であるので、この場を借りて、評者も少し議論に参加してみたいと思う。

- (1) 「明治20年頃までの官員は、薩長土肥に代表される維新の功労藩の士族たちである。・・・この『官員言葉』は、西日本的性格の言語のようである」(第4章、野村, pp. 78-79)

→ 評者・英語史・家入

標準化に際してどの変種が選ばれるかという点はたしかに重要であるが、変種自体、決して固定的なものではなく流動的であることがわかる。人々の移動が標準化に影響を与えたことは英語でもしばしば議論される。ロンドン地域の英語が標準化の核になったとしても、北からの人々の流入がなければ、三単現の -s の定着はなかったであろう。

- (2) 「こうした、表音文字を使用することから、話しことばと書きことばを共通のものとしていくことを主張した人物が、実際に書いた書きことばはどのようなものだったか。・・・彼らが書く日本語は文語体で、前島密が漢字廃止の実践として発刊した、平仮名書きの『まいにちひらがなしんぶんし』も、一貫して文語体で書かれ、口語体は選択されなかった」(第5章, 田中牧郎, pp. 93-94)

→ 評者・英語史・家入

言語についての運動を行った人々が実際の言語使用では必ずしもそれに従った特徴を示すとは限らないという点は興味深い。英語では、18世紀の文法家、Robert Lowth の文法記述と Lowth 自身の言語を比較対照した Tieken-Boon van Ostade (2011) の研究などが有名である。

- (3) 「英語においてもイギリスの標準英語では用いられなくなった言語的特徴が移民先のアメリカの英語で生き残っていることがある(こうした移民先の言語の保守的な傾向はcolonial lagと呼ばれる)・・・」(第8章, 英語史・寺澤コメント, p. 152)

→ 評者・英語史・家入

アメリカ英語の中にイギリス英語では使用されなくなった特徴が残っていることは大変興味深く、言語の地域性を考えるときに歴史的視点が不可欠であることを示す。一方で近年は、アメリカ英語で進む変化がイギリス英語に影響を与えている事例も少なくない。たとえば help people understand ... のような help が原形不定詞を従える構文はアメリカ英語からイギリス英語へと広がっている。これを help の文法化とする見方もあり、もしそうであるとするならば、文法化がアメリカ英語でより進んでいる事例ということになる。

- (4) (ジェンダーとの関連で)「これは avocat (男性の弁護士) と advocate (女性の弁護士) のように、よく使われる男性名詞を女性名詞に変化させる事例もあれば、女性形の冠詞をつけて女性を示す用例 (une ministre 女性大臣) もある」(第8章, 西山, p. 152)

→ 評者・英語史・家入

ここに挙げられた事例は、言語的に女性が排除されている場合の対応の一つであるが、名詞の性がほとんどなくなってしまった英語では、より中立的な名詞、たとえば chairperson (chairman ではなく) を使用する方向への変化が目立つようである。人称代名詞には性が残っているので、性別がわからない場合には he の使用を避けて、単数であっても性別を特定しない they を使うような対応が顕著である。第7章 (p. 137) も参照。

- (5) 「ルターは、聖書をドイツ語に翻訳することで聖書を民衆に解放した。聖書のドイツ語翻訳により信徒はみな、ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語の知識がなくても神のことばが理解でき、自らが自らの司祭となることが可能となった」(第9章, 高田, p. 170)

→ 評者・英語史・家入

ルターが聖書を翻訳したことは、たしかにラテン語等からの「解放」であったが、その際にドイツ語の特定の変種を選ばなければならなかった点にも注目したい。すなわち、別の変種のドイツ語を話す人にとっては、完全な意味での「解放」ではなかったかもしれない。聖書は日本語にも翻訳されたが、その日本語には特殊な語彙も多く、聖書の日本語をより身近なものにしようという動きは現在も続いている。日本語なのに神の言葉が理解できないという信者の声を受けて聖書を地域の言葉に翻訳した山浦玄嗣(訳)の『ケセン語訳新約聖書』を思い出した。

4. 本書の意義と貢献——今後への期待

最後に、本書の意義と貢献について述べ、本書評の結語としたい。本書の最大の貢献は、対照言語史への道を大きく開いたところにある。「対照言語史」という用語を提示し、それを副題に掲げた意義は大きい。本書は、標準化というテーマを軸に、異なる言語の歴史を学ぶ機会を提供してくれたが、将来的には、その他の多様な事象についても、言語史を比較対照しながら議論を進める方向が模索されるであろう。その意味で本書には拡張性があり、今後への期待も大きい。

また標準化に限ってみても、異なる言語史の中で使用される各種のモデルが一冊の著書に収められた意義は大きい。Haugen (1966) のモデルのように、言語を問わず広く使用されているものもあるが、Koch & Oesterreicher (1985) のモデル(本文p. 9参照)のように、ドイツ語分野では頻繁に使用されるものの、その他の言語では利用されることが少なかったモデルもある。これらが本書の中で提示されたことは、多様なモデルの有効性を確認する機会となった。また、本書の中でも例えば第6章では、HaugenとTrudgill (2003) をヒントに、堀田が新たなモデルを提供する。このようなモデルについての情報共有は、言語史の理解に議論の手がかりを与えてくれる。

またこれとの関連で、堀田の英語史の標準化と脱標準化概略を示したグラフ(p. 107)もわかりやすい。これと合わせて使用するとよいと思われるグラフとして、Watts (2000: 41) があるので、ここで紹介しておきたい。language perfection, language superiority, language and nationality, undesirability of change など、言語にかかわる人々の「神話」(myth) の強弱が時

代とともに揺れ動く様子を、1350年から1750年を横軸にグラフの形で描いたものである。このグラフは、英語のみを対象としたものであるが、他言語についても応用が可能かもしれない。以上のように、本書にはこの分野の研究を活気づける役割があると感じる。分野のさらなる発展を期待したい。

参考文献

- Haugen, Einar (1966), 'Dialect, Language, Nation', in: *American Anthropologist* 68, pp. 922-35.
- Hickey, Raymond (2012), 'Standard English and standards of English', in: Raymond Hickey, ed. *Standards of English: Codified Varieties around the World*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1-33.
- Koch, Peter/Wulf Oesterreicher (1985), 'Sprache der Nähe – Sprache der Distanz: Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte', in: *Romanistisches Jahrbuch* 36, pp. 15-43.
- Laing, Margaret/Keith Williamson, eds. (1994), *Speaking in Our Tongues: Proceedings of a Colloquium on Medieval Dialectology and Related Disciplines*, Cambridge: D. S. Brewer.
- OED = *Oxford English Dictionary*, <https://www.oed.com/> (2022年7月19日)
- Smith, Jeremy (1996), *An Historical Study of English: Function, Form and Change*, London: Routledge.
- Tieken-Boon van Ostade, Ingrid (2011), *The Bishop's Grammar: Robert Lowth and the Rise of Prescriptivism in English*, Oxford: Oxford University Press.
- Trudgill, Peter (2003), *A Glossary of Sociolinguistics*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Watts, Richard J. (2000), 'Mythical Strands in the Ideology of Prescriptivism', in: Laura Wright, ed. *The Development of Standard English 1300-1800*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 29-48.
- 山浦玄嗣 訳 (2002), 『ケセン語訳新約聖書 マタイによる福音書』, 大船渡市: イーピックス.
- (2003), 『ケセン語訳新約聖書 マルコによる福音書』, 大船渡市: イーピックス.
- (2003), 『ケセン語訳新約聖書 ルカによる福音書』, 大船渡市: イーピックス.
- (2004), 『ケセン語訳新約聖書 ヨハネによる福音書』, 大船渡市: イーピックス.